

土地に秘められた「人間の物語」

鉄路の跡を歩く

梯久美子

一昨年の秋の終わりに、三十数年間暮らした東京から札幌に移り住んだ。

私は熊本で生まれたが、五歳のときに父親の転勤で札幌に引っ越し、大学卒業までを過ごしたので、実質的な故郷である。

私の趣味は廃線めぐりで、これまで全国で六十路線以上を訪れている。後述するが、近年は海外にも足を延ばし、サハリン（樺太）で廃線探索をした。

Uターンして暮らすことになった北海道には、知る人ぞ知る廃線が多い。これまで、国鉄根北線、下夕張森林鉄道、国鉄手宮線、定山溪鉄道などを訪れたが、とくに印象的だったのは、根北線と下夕張森林鉄道で

もう見ることでできない幻の橋である。

北の歴史と風土を反映してか、北海道の廃線の遺構は、こんなふうなスケールの大きいものが多く、廃線ファンにとっては大いに魅力的だ。

過疎化や札幌への一極集中のため、北海道には廃止になった鉄道が、ほかの都府県にくらべて多い。それ自体はともに残念なことなのだが（どの鉄道路線も廃線にならず、存続するのが鉄道ファンの望みである）、東京に住んでいたころにはなかなか行くことのできなかつた廃線を、これからはもつとひんぱんに訪れることができる楽しみにしていた。

樺太に渡った札沼線の鉄路

札幌に帰住したのは秋の終わりと最初に書いたが、それは十一月初旬のことだ。十一月といえばそろそろ雪が降り始めるころで、引っ越し直後で忙しかったこともあり、春になるのを待って廃線の旅に出かけようと思っていた。

北海道の廃線めぐりに冬は適していない。雪が積もると線路の跡をたどることができないし、橋やトンネ

ある。

一九七〇（昭和四十五）年に廃止になった根北線には、巨大なコンクリートの十連アーチ橋が残っていた。国道を通すために橋脚が二本撤去され、左右に分断されてしまっているが、その断面には鉄筋が一本も見えない。作られたのが戦時中で、鉄が不足していたため、コンクリートのみで作られた橋なのだ。

橋げたは国道の左右に広がる森に消えてゆき、全容を見わたすことはできない。橋脚の下に立って見上げると、年老いた手負いの恐竜が茫然とたたずんでいるようで、胸が痛んだ。

一九六三（昭和三十八）年に廃止になった下夕張森林鉄道では、大夕張ダムダム湖であるシューパロ湖にかかる三弦橋を見た。

全長が三八一・八メートルもあるこの橋は、世界でも数例しか建設されなかった「三弦トラス橋」で、四角錐（ピラミッド形）を並べて連結した独特の構造になっている。色は鮮やかな赤で、青い水面と周囲の森の緑に映えて美しかった。

私が訪れたのは二〇一〇年だったが、新しくできたダムのため、二〇一四年に水没してしまった。いまは

ルなどの遺構も雪に埋もれてしまう。

また、見たいポイントは人里離れた場所にあることがほとんどなので、そこまでたどりつくのも一苦労である。

ところが、年が明け、ようやく春が近づいてきたと思ったところに、新型コロナウイルスの感染が広がりはじめた。廃線探索に限らず、移動すること自体が難しくなっていたのだ。

この年（二〇二〇年）で唯一、行くことができたのは、新型コロナウイルスの第一波が始まる前、三月初旬に訪れた札沼線である。ただしこれは、正確に言うとは廃線探索ではない。

札沼線は、二〇二〇年五月七日を最後に、部分的に廃止になることが決まっていた（実際には、新型コロナウイルスの感染拡大により、人が多く集まることを懸念して、最終日がゴールデンウィーク前に繰り上げられた）。

くわしい駅名を書いても地元の人以外には分かりにくいと思うので、とりいそぎ簡単に説明すると、札幌市内から北東に向かって延びている約七十六キロの路線のうち、札幌から遠い部分の約四十七キロが廃止されることになった。札幌に住むようになってからその